

聖書：コリント人への手紙第二 10：12～18

説教題：主に推薦される人

日時：2025年2月23日（朝拝）

前回から10章に入りました。このⅡコリントの最後10～13章は偽使徒・偽教師たちについての厳しい言葉が並べられているところです。パウロが涙ながらに書いた手紙を通してパウロとコリント教会の関係は改善方向へ向かいましたが、その状態をコリントに入り込んでいた偽教師たちは快く思わなかったのでしょうか。彼らは一層力強くパウロへの批判運動を展開したようです。それによってコリント教会の中にも、その主張に再び動かされる人たちが出て来ました。その情報に接して、すでに書いた手紙に追加して記したのが、この10～13章であると考えられます。

そのパウロの反対者たちの批判の言葉が前回見た10節に記されました。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことではない」。手紙ではいかにも威厳ある者のように語るが、いざ自分たちの前に現れると全く人に印象を与えるような力強い人間ではない。遠く安全な場所にいる時だけ威勢のいいことを言う、本当は弱い人間である。あれは使徒として信頼するに値しない！そのように批判していたようです。しかしもしパウロの行動が控え目なもの、おとなしいものに見えたとすれば、それは1節にあった通り、彼が「キリストの柔和さと優しさをもって」関わっていたからでした。そのようなへりくだって仕える姿勢を彼らは誤解し、見下していたようです。

彼らはパウロと自分たちを比較し、自分たちがいかに優れているかをアピールしてパウロを貶めていました。しかしパウロは12節で「私たちは、自分自身を推薦している人たちの中のだれかと、自分を同列に置いたり比較したりしようとは思いません」と言います。それは「愚かなことです」と彼は言います。偽使徒・偽教師たちは何を誇っていたのでしょうか。後の11章22～23節を見ると彼らは自分たちがヘブル人であること、イスラエル人であること、その民族性、自分たちの出自について誇っていたようです。また彼らは自分たちをキリストのしもべと誇っていたようです。以前3章でパウロには推薦状がないと批判していましたが、それと逆に「自分たちは推薦状を持っている。エルサレム本部とのつながりがあり、資格を持っている。その証明書がある」と誇っていたのでしょうか。また先ほど見た10節の言葉の中に「話は大し

たことはない」とあったように自分たちの雄弁術、話の巧みさを誇っていたようです。また彼らはパウロが苦難の内に奉仕していることを軽蔑していました。それと反対に自分たちはいかに苦しみとは無縁であり、神の守りと祝福の内にあり、成功しているかという自らの繁栄を誇る勝利主義に立っていました。そんな考えのもとに誰が一番偉く、優れているのか、お互いの間でも比べ合い、競い合うことをしていたようです。パウロはそんなことは愚かだと言います。だからそんな争いに加わるつもりはないと言います。

パウロの考えが 13 節に示されています。それは「限度を超えて誇らない」ということです。「神が私たちに割り当ててくださった限度の内で」物事を考え、その限度の内で誇る場合は誇るということです。この誇るとは自慢するという意味ではありません。これは自分の大きな喜びとするというような意味です。このあと見るように、それは神への感謝と一つに結び付いていることでもあります。ここに私たちが今日改めて学ぶべき大切な真理があります。それは神が私たちに割り当ててくださった限度というものがあるということです。一人一人みなそれは違います。神は一人一人に最善の御心と計画を持ち、私たちになすべきことを割り当ててくださっています。またそのために必要な賜物も与えてくださっています。そして私たちをそれぞれの働き場へと遣わしてください。この神の割り当て、神の召しを受け止めて精一杯忠実に生きるようにすることが最も肝心なことであるということです。神が一人一人に対して持っておられるご計画と与えている賜物・使命は異なりますから、私たちがあつ一つの勝手な視点から互いに何かを比べて優劣を論じ合おうとすることは全く意味のないことです。視点が変われば評価は変わります。また人間の考えなどコロコロ変わり、当てになりません。いくら地上で私たちがお互いの間に順位をつけても、やがての日に神の前でそれらは全部ひっくり返されてしまいます。何と意味のないことに無駄なエネルギーを費やして来たかが明らかにされます。それは愚かなことです。大事なのは神が与えてくださっている賜物と召しに対して私はどうなのか、忠実にお応えしているのかということです。この主に良く評価されることを求めてパウロは歩んでいたのですし、私たちにとってもそれが大切なことです。

そのパウロの具体的なケースについて 13 節後半から証しされています。パウロは神の割り当てに従って「あなたがたのところまで行ったこと」、すなわちコリントに行ったことを誇ると言っています。パウロへの神の割り当て、パウロの召しとは一言

で言えば異邦人宣教でした。彼はダマスコ途上で劇的な回心をし、主を信じる者とされましたが、その時、主は彼のもとに遣わしたアナニヤという弟子に使徒の働き 9 章 15 節でこう言われました。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」 またその後、エルサレムを訪問した際、エルサレムのおもだった人たちはペテロがユダヤ人への福音を委ねられているようにパウロは異邦人への福音を委ねられていることを理解してくれたとガラテヤ書 2 章 7 節に記されています。そしてヤコブとペテロとヨハネが交わりのしるしとして右手を差し出しました。こうしたことの内にもパウロが異邦人への使徒として召されていることが確かめられました。この神の割り当てに従い、その限度の内でコリントへ行って主の働きをしたことを誇るとパウロは言います。このことを主にあって感謝し、自らの大いなる喜びとしている、と。

14 節は一読して意味が分かる文章にはなっていませんが、よく考えれば言いたいことは見えて来ます。「私たちは、あなたがたのところに行かなかったかのようにして、無理に手を伸ばしているのではありません」とありますが、言いたいことは「あなたがたのところに行った者だから、あなたがたに手を伸ばしている」ということです。他の日本語訳聖書はここを次のように訳しています。「私たちは、あなたがたのところに行ってもいないのに、背伸びして誇っているわけではありません。」 つまり行った者として関わっているということです。しかも 14 節後半で「事実、私たちは他の人たちに先んじて、あなたがたのところキリストの福音を携えて行ったのです」とあります。偽教師たちはパウロを攻撃して、権威や資格のない者なのにコリント教会の上に手を伸ばそうとしていると批判していたようです。それに対してパウロは神の割り当てに従い、私たちがコリント教会を設立したのだと言っています。15 節で彼は「私たちは、自分の限度を超えてほかの人の労苦を誇ることはしません」と言います。これはまさに偽教師たちがしていたことでした。他の人の労苦を奪い取って自分たちの手柄であるかのように誇っていたのです。

そしてコリント教会を設立したパウロの願いが 15 節後半にあります。それは彼らの信仰が成長することです。偽使徒たちはコリント教会を自分たちのものとし、自分たちが名誉ある者となることに専ら関心がありましたが、パウロはそこに誕生した聖徒たちの成長と益のために心を砕いていました。そしてそこにおける自分たちの働きが「定められた範囲の内で拡大し、あふれるほどになることを」望んでいました。

それはさらに向こうの地域にまで福音を宣べ伝えようとする志とつながっていました。パウロがコリントを越えてさらにどこの宣教を志していたのかは、この後に書かれるローマ人への手紙を見ると分かります。それはイスパニアすなわちスペインです。当時の世界における地の果てです。彼はローマ書 15 章 20 節でこう述べます。「このように、ほかの人が据えた土台の上に建てないように、キリストの名がまだ語られていない場所に福音を宣べ伝えることを、私は切に求めているのです。」そして 23～24 節でこう述べます。「しかし今は、もうこの地方に私が働くべき場所はありません。また、イスパニアに行く場合は、あなたがたのところに立ち寄ることを長年切望してきたので、旅の途中であなたがたを訪問し、しばらくの間あなたがたとともにいて、まず心を満たされてから、あなたがたに送られてイスパニアに行きたいと願っています。」今日の箇所 16 節後半に「ほかの人の領域ですでになされた働きを誇るためではありません」とありますように、彼は他の人によって準備された働きを奪い取って自らの手柄にしようなどという考えを毛頭持っていません。むしろキリストの名が伝えられていない場所へ出かけて行き、福音を伝えるというのがパウロに与えられた神の召しでした。この神に割り当てられた使命を果たすことにひたすら専心しているパウロの姿が証しされています。

今日の話のまとめとしてパウロは 17 節で「誇る者は主を誇れ」というエレミヤ書 9 章 24 節を引用します。パウロは「誇る」という言葉を使って来ましたが、これは自慢するという意味ではないということです。主の割り当てに従い、主により頼みながら働いた結果、そこに何らかの良い実りが見られるなら、それは主のおかげです。主に栄光を帰すべきことです。私たちは神の割り当てに従って主のために働きますが、その主の働きがなされて行くためには主に祈り、主の力により頼む必要があります。そのように主の召しに従い、主により頼んで事に当たるなら、主の御心にかなう何らかの良き実りが現れるはずですが、もちろんそれは簡単に数や量に還元して測れるようなものではありません。しかし主が意図された結果が出るはずですが、神はそのために召したのですから。それが現れたなら、それはただただ主のおかげであり、主の恵みによること、主の憐みによることです。ですから主を誇るべきです。自分を誇る余地はここにはありません。もし私たちが自分を誇るなら、それは主により頼むプロセスを正しく踏んで来なかったことを暴露するものになるでしょう。またそういう人間的な力を出した結果は本当の意味では主によってなされたものではないため、やがての日

には消え去るものであるかもしれません。

最後の18節に「自分自身を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ本物です」とあります。主に推薦される人とは、主の召しに従い、主により頼み、主の御心になう働きをした人のことです。その人に対して主は「よくやった。良いしもべだ」と言ってくれます。このような主の評価こそ永遠に意味あるものです。パウロは同じことをIコリント4章5節でも言っていました。真の榮譽はやがての日に主から賞賛をいただく者となることです。ですから「主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません」と彼は言いました。「主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。」その日に主からの賞賛の言葉をいただく人、主に推薦される人こそ真に幸いな人です。

今日の私たちもお互いの中で比較する誘惑は強いと言えます。特にインターネットやSNSの普及によって、他の人の活動の様子や近況が以前よりも良く分かる時代となりました。教会もそうです。礼拝の映像をそのまま公開して流している教会もあり、それを見ればどんな人がどれくらい集まり、どんな賛美をし、どんな説教がなされ、どんな雰囲気であるかがかなり良く分かります。それを見てまさに私たちは色々な観点から自分たちを同列に置いたり、比較しようと思えばそれができる環境があります。しかし教会といえども神の割り当ては色々です。都会にある教会か地方にある教会か。また置かれた地域の特色、そこに集う人々の特色も様々です。他の教会から学べることは学びつつも、私たちにとって大切なことは神の割り当て、神の召しに忠実であることです。人間の評価ではなく主に推薦される教会の歩みを私たちは祈り求めて行くべきです。

それは一人一人個々人においてもそうです。Facebook、インスタグラム等のSNSの背後に流れている本質は「自慢」であるとある人は言いました。全部がそうだとまでは言わないにしても、確かにそこには自分はこのように幸せでうまく行っているとアピールする華やかな世界が満ちています。ですからそういうものを多く見ていると気分が落ち込んで来る人が多いと言われます。次々に自慢する人のアピールに接して自分と比較している内に、自分は幸せではない、ひどく失敗した人生を送っているように思えて来るのでしょうか。しかし神の割り当ては一人一人みな違います。神は一人一人に異なるご計画と働きを用意しておられ、そのための異なる賜物をも与えてくださ

っています。それを受け止め、その主に対して忠実に歩むことこそが大切なことです。その主により頼み、主の召命に応える道を行くところに私たちの真の満足があり、誇りがあり、感謝と喜びがあります。またそのような人こそ主に推薦される人、主の賞賛を受ける人なのです。

神が与えてくださっている私たちへの割り当ては社会におけるある働きかもしれません。また家庭における働きかもしれません。教会における働きかもしれません。地域における働きかもしれません。これらの二つも三つも兼ねる場合もあるでしょう。大切なことは人との比較ではなく、私に対する主の召しを受け止め、その主に対して忠実に、また精一杯生きることです。人間の比較は最後には全く意味のないものであることがはっきりする愚かなことです。それらに心惑わされることなく、主の賜物と召しをもう一度よく考え、受け取めて、これに忠実に応える歩みを何よりも求めて歩む者でありたいと思います。そして主に頼って御心にかなう実りを生み出す者として用いていただき、そこに深い感謝と誇りと喜びを覚えて、かの日に「よくやった、良いしもべだ」とお褒めの言葉をいただくに至る主のしもべたちの歩みへ導かれてまいりたいと思います。